

はじめに

近江牛については、彦根牛をはじめとする多くの文献があり、その歴史の厚みを伺わせるものである。今回、解説書を作成することとしたのは、滋賀県が「近江牛の歴史」として年表を提示しており、この年表を補足することができればとの思いで記載させていただいたものである。この解説では言い尽くせていないこともあります、ご意見をいただきながら改善できればと考えています。

このことから、それぞれの時代の背景、その時々生まれてくる必然性を含めて解説することにしました。当時、牛は関西・中国・北九州地方に役牛として飼育されていた。中国地方でたたら製鉄に必要な炭や砂鉄を山から運ぶために牛が利用されていたことから、牛の市場取引では最も多くの牛が中国・北九州地方で多くの牛が取引されていた。また、関西・中国・北九州地方では、温暖で平坦な水田が多いことから、温厚で取り扱いやすい牛が求められていた。さらに、関西では鎌倉時代から役牛として最も優れた但馬牛が重宝がられ、多くの水田で但馬牛の雌が役牛として飼育された。

明治に入ると欧米人が牛肉を求めることとなり、全国を走り回って商売をしていた近江商人が関西・中国地方から牛を集め、関東に牛の搬送を始めることになった。近江が食肉産業に果たしていた大きな役割は牛の搬送であったと言える。

交通機関の進展に伴い、生牛の陸路運搬から海運輸送となり、次いで、非常に恐ろしい牛の病気である「牛疫」が発生して、牛の流通は鉄道輸送による枝肉輸送となった。その後、牛疫が治まると生牛の鉄道輸送となった。

鉄道輸送となると八幡駅（現在の近江八幡駅）から出荷が始まり、消費地である東京ではこれらの牛を「近江牛（おおみうし）」の名称として呼ばれるようになった。その名称が今も呼ばれ続けている。